岡本光博は一九六八年京都市生まれ。滋賀大学大学院教育学を修了後、アート・スチューデンツ・リーグ・オブ・ニューヨークで学び、CCA北九州、ドイツやインド、スペインなどでレジデンスを経験した後、二〇〇七年からは京都を拠点として国内外で活躍を続け、二〇一二年より京都に現代美術ギャラリー、KunstArztを開設。「鑑賞者、社会に対して刺激のある「くすり」を提供していきたい」[*3]との考えから、カプセル型の錠剤をロゴに、また画廊名もドイツ語で「芸術」「医者」を意味する単語を組み合わせた。社会的な問題や著作権問題などに果敢に挑み、意

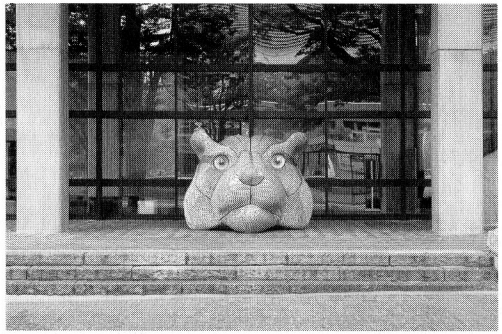

図28　岡本光博《トラロープ》2019

欲的な活動で注目される。しかしこうした彼の手法は、しばしば軋轢を招き、ある時には主催者側の自己検閲によって作品が差し替えられ、または警告文が送られてくるなど様々なレベルでの困難に出会う。二〇一〇年に神戸ファッション美術館で開催された「ファッション奇譚」展に、岡本は《バッタもん》を発表した。バッタもん、という言葉は偽の、コピーの、ということを指す主に関西で使われるスラングであり、関西的なセンス、大上段に構えた「真正」さを疑い、茶化すようなニュアンスも含まれ、反骨精神あふれる呼び名であろう。違法な偽商品が巷にあふれる現実に皮肉交じりに注目し、高級ブランドのバック生地で昆虫のバッタを作るこの作品はユーモラスに消費社会を風刺する秀逸さと直接的なメッセージ性をはらむが、これに対して、ルイ・ヴィトン社から美術館と岡本自身へ展示中止を求めて文書が送られた。その結果作品は撤去され、図録は販売中止、岡本の作品がメインイメージに使用されているポスターは回収された。図録には岡本の文章「バッタもん採集の話」[*4]も掲載されていたらしい。しかし、岡本によれば翌年、ルイ・ヴィトン社のデザイナーによるバッタが発表されたという。高度消費社会において、オリジナルとコピーの境界を問う本作品が投げかけた波紋は大きい。

《トラロープ》は、工事現場などでよく見かける黄色と黒の縞模様のロープ（その色からタイガーロープと呼ばれることも多い）に着目し、縄文様を利用して虎の形に形成した立体作品である。身近ではあるが普段注目されることの少ない素材を取り上げ、その名前の由来とかけて提示。知らず知らずの

うちに刷り込まれている思い込みを覆すような、岡本の鋭い視点は、そのユーモア感覚とあいまって、「空気を読んで自粛」する相互監視的な圧迫が社会全体にじわじわと高まる現在、その重要性は一層高まっている。京都会場ではロームシアター京都に《トラロープ》(二〇一九)を設置【図28】、道行く人々を驚かせ、日常に侵入する異様な物体の危うさとおかしさを伝えた。

ポズナン会場では、カントルと草間彌生に着想を得て制作された《Dead Class》(二〇一九)【図29】を、スターリ・ブロヴァルに展示、ポズナンでは企業から作家への手紙のテキストを大理石にカットし、それと関連する作品や商

図29　岡本光博《Dead Class》2019

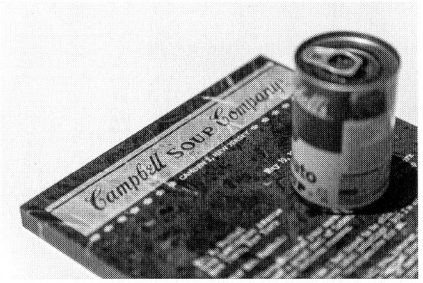

図30　岡本光博《著作権の机1》2017

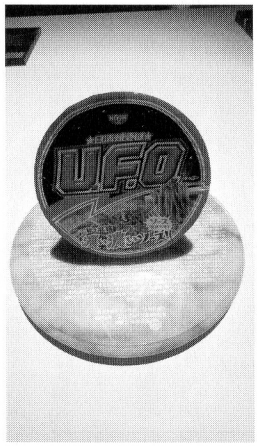

図31　岡本光博《著作権の机2》2018

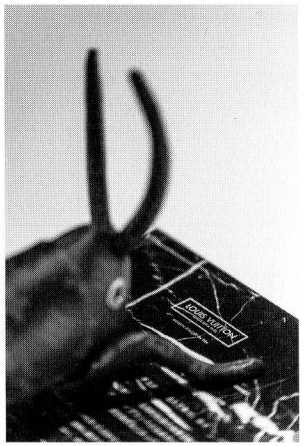

図32　岡本光博《著作権の机3》2018

品を大理石の上に乗せて展示する《著作権の机》シリーズ1、2、3を展示した。(《著作権の机1》(二〇一七)はキャンベル社からアンディ・ウォーホルへの感謝の手紙を大理石にカット。商品「キャンベルスープ」【図30】を大理石の上に置いた。《著作権の机2》(二〇一八)は日清食品社から岡本宛の抗議の手紙を大理石にカット。商品は「UFOやきそば」【図31】。《著作権の机3》(二〇一八)はルイ・ヴィトン社から岡本宛の抗議の手紙を大理石にカット。その上に作品《バッタもん》(二〇一七)【図32】を置いたものを出品した。三会場それぞれにユーモラスかつ皮肉に現代の社会や文化に問いを投げかける、出色の展示であった。